

◇近況・随筆◇

素人校長奮迅記 (2)

浅井辰郎

前号では校長の予期しない忙しさを列挙したから、今度は高校に内在する諸問題を順に説明して明確なご理解を得たい。〔共学問題〕着任早々小学校6年生の父兄有志から、男女共学の時代だから高校にも男子を入れよと求められた。もう2年位前から運動をしており、文部大臣にも会ってそのことが新聞にも出ていた。私は「その理由では弱い。ここは女子だけの実験校として設置されたものだから、全国の女子校が共学校になったとしても、ここは最後まで残るべきである。これを覆す理由を述べてくれ」と再三求めたが、2年経った今もそれは出て来ない。一步退いても付属高校生の中に「女子校こそ女子の責任感と実行力を養うものである」こと、大学生の中に「女子校でこれを養ったから大学で男子に伍して行ける」という重要な意見も多い。私や教頭桜井先生の考え方、そしてこの意見を50年8月の長時間に亘った会見で判って戴けたと思っていたら、51年4月には「私どもはまだ諦めていません——。」というお手紙、8月には帰国子女教育をお茶大がするという新聞誤報(正しくは学芸大)を好機と見た再要求。それは誤報でこれこれだとお話したらシュンとしたが果して納得されたか？。

〔M騒動〕これは50年9月21日文化祭2日目の早暁、配下2人(?)と共に展示を破り棄て、廊下・教室に糞尿を撒き、昼前には又現われてアッという間に混雑客の中に発煙剤・爆竹・文化祭破壊のピラを撒いた事件である。25日出校停止処分。所が10月22日夜再び糞尿を全教室に撒き、中間テスト粉碎を画した。全校力を併せて急ぎ掃除し、1時間の遅れのみでテストは無事完了。この2回の騒動のため日を夜についで臨時会議・教官宿直・警察連絡・特別HR・全校集会・父兄説明・本人の親を説得……と例年にない仕事が暮まで続き、年を越して無期停学にした。たった1人の生徒の偏った思想と行動から高校が4ヶ月余も翻弄され、全教職員は瘠せた。せめてもの救いは忘年会で「校長とはもう3年もお際合している気がします」と言われたことで、これは9ヶ月目の私の実感でもあった。

〔一貫教育〕教官はこの語を児童発達の観察・指導やカリキュラムの一貫性と考えるが、父兄は大体において一度入ったら高校まで必ず運んでくれる一貫性と思い込んでいるらしい。各付属で「必ずしも上へは行けませんよ」と指導している由だが、事実上の全入制は今や大変な結果、つまり少数ではあるがひどい成績不振者を生み出し、高校へ来てもbutが読めぬ、 $a^2 - b^2$ が因数分解できぬ、漢字の入った文章は試験問題でさえ読めない者がいる。51年度から学期末に多くの先生が補講・追試をやって下さるが、結果は樂觀できず、52年春には留年者が出そうである。こうなる前に小学校あるいは中学校から適切な学校へ行った方が、生徒本人には絶対的に幸福なのだが、親にそれが判ってもらえない。又大学でもまだ判ってもらえない。ここに胸かきむしられる想いがある。

〔新たな問題〕私に新しく判って来た1つは「入試監督や教育実習が大学から付属へ一方的に押し付けられてる」という付属教官の意識である。それは付属教官は大学入試の監督はするが、その逆はとも考えられない。他大学の2、3倍もひき受けている教育実習を大学教官は余り見に来ない、という事実から云えば無理からぬことである。現に私も、「そんな文句を云わさないのが校長の役である」と、まるで植民地の総督のように要求されたこともあるが、私のヒューマニズムはそれを許さない。第2の問題は教官人事のとき常に問題になることで、付属の校長・教官・事務官の定員がいくつか大学に吸い上げられたまゝになっていることである。或る所までは調べられるが、激しい利害が伴う問題だから一向に進まない。学長あての年賀状に、「この問題の解決こそ付属問題の最重点です」と書き、52年1月の付属連絡会名でこの解明と処理を学長権限で行って下さるような文書を送ることにした。果して如何？。

高校の修学旅行に関してアンケート調査も2種類始めた。とてもおもしろいこの結果は又来年に。

近頃の話から

浅海重夫

職種のちがう知人から時々、いわゆる巷間のでき事について、大学の先生たちはどう考えるのかと聞かれることがある。昭和51年はロッキード事件をはじめ、総選挙前後の政界事情、ニセ電話事件、ミグ25事件など、話のたねになる政治面・社会面のでき事が多かつたし、200カイリ専管水域の問題や火星探査、人工遺伝子合成、毛首席の死去、はてはオリンピックやプロ野球にいたるまで、いろいろの話題はあったけれども、大学の教室内での教官同志、あるいは学生たちとの会話にも、これらの話はほとんど出てこないで、大学人はどう考えるのか、どんな話をしているのかの間にはよく答えられない。しかし日露戦争も知らずに学究に専念していたという昔の大学教授のような先生は、今時はやらないし、恐らく先生がたの家庭では世情の話もかわされているのだろう。

最近わが家で話題となったことの1つは、巻頭言でふれた家庭科教育に関する問題であり、もう1つは自然農法の話であった。中学、高校の家庭科で最も重視すべきテーマは、料理裁縫や家庭経済ではなくて子供の心をいかに育てるか、ということであり、学校教育よりも以前に家庭生活が子供を作り上げるのだということ、男生徒にも教えるために家庭科が必要だという結論になった。また最近では、家事や内職に多忙で子供との接触時間の極端に減った母親が、子供にテレビやテレコを与えて放置するために、会話のできなくなった子供が多いという。育児書や教育用機器の普及が、家庭や学校における教育の姿勢を歪曲させていると思われるが、この見方は、化学肥料と農機具による企業先導型の現代の農法（科学農法）を否定する、自然農法の主張と一致することに気がついた。

自然農法というのは、愛媛県のある実践農家が20年以上の試行錯誤の後に到達した農法で、無耕起・無肥料・無農薬の直播による稲麦二毛作田を耕し、収穫後全量のワラを土に還す。害虫のウンカは天敵のクモが適当に駆逐してくれる。現代の科学農法に比べて収量はむしろ高く、労力ははるかに少なくてすむという。有機農法と似ているが意図は全くちがうもので、農業を支配する要因は無限に